
飽きやすい人が何年もかけて書こうとするファンタジー【完成日 = 未定】第 1 章

霧衣きい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

飽きやすい人が何年もかけて書くこととするファンタジー【完成日
〓未定】第1章

【Nコード】

N0201I

【作者名】

霧衣きい

【あらすじ】

予定は未定。お先は暗闇、目指すは完走。第5章で完成予定です。続きはこれから考えながら書きます。いつか挫折しようとも、半年経てば再熱もしましょう。このお話は純粋にファンタジーです。片方を女性にしたら良いのですが、恋愛が苦手なので友情しかありません。いずれはグロテスクな表現をするかもしれません。苦手な方はごめんなさい。では、完成を祈りながらどうぞ！

ブローグ

ボクの記憶は、これから無くなる。

覚悟はできていたから、あとは最後を見て終わりにしよう。

広大な砂漠の真ん中で、ボクは死体を発見した。

死体があるはずも、それが喋り出す事もありえないはずなのに、黒い影はボクをしっかりと見て名前を尋ねてきた。

すぐに名前が出てこなかったのは、こんなありえない状況の所為でもあったけれど、単に慣れない言葉だったからなのかもしれない。

ボクの記憶は、これから無くなる。

残す事なんて何も無かったのに、影の所為で、守ると言う行為だけは残ってしまいそうだ。

何を守るかなんて、忘れてしまおうと言うのに。

それは、昔の自分を見ているかのようなだった。

深い森では無いにしろ、街から離れた草道の途中に、髪の高い男がただ呆然とこちらを見ている。

「……名前は？」

同じ質問を投げかけたが、やはり男は変わらず石を握りしめていて答えようとはしない。

その小さな青い石には、名前なんて書いてあるはずもないだろうに、何故か大事な物を扱うかのように思えた。

俺はその状況を知っていた。

「お前、記憶無えだろ」

案の定、男は頷いた。そして男は、手のひらの石を眺めてから俺に名前を聞いてきた。

別に隠す名前でもないので答えると、男はそうですかと相槌をうち、そして終わった。

日が沈んでゆく中、男二人が立ち尽くしている状態。記憶喪失の男はきつと、ここはどこで自分は誰で何がどつたらでなんて考えるのに必死なのかもしれないが、なんのアクションもないのは少々困りものだ。

このまま立ち去ってもいいもんか。助けを求められたり、せめて何か話かけられたりでもすればここまで居心地は悪くならなかっただろうに。

嫌な静けさを割るように、吸った息を思い切り吐き出して、俺は男の名前を呼ぼうと口を開いた。

出てきた言葉は無く、余計に合間の沈黙が痛くなってしまう、首を掻いてごまかした。

「あー、のな、その誰かさん。近くに街もあることだし、送ろうか」

この辺には、凶暴でないにしろ魔物だつて出る。夜になれば危険だろう。

まったく、なんだって見ず知らずの他人なんかを。

自分に毒づいたところで、提案してしまったのは自分だし、どうやら男の方も賛成のようだし。

「ありがとうございます、ヴィレスさん」

「送るだけな。名前無いと不便だからサディアって呼んでいいな」手招きして、来た道を戻るように街へと歩きだす。

男はそれについてきて、名前の由来を尋ねてきた。

別に隠す事でもないの、俺が昔そう呼ばれてたんだと答えると、また簡単な相槌が返ってきて終わった。

イサリアという星は、一つの大陸と、それを囲う荒い海で成り立っている。

大陸の東。ほとんどが硬い土で覆われた土地には、閑散とした小さな街や村が点在していた。

ここは唯一の湖が近くにある、緑豊かな街ラスアウラ。東への旅行者は必ずここを訪れて、帰ってゆく。これより東に、観光場所が無いからだ。

太陽が沈みきり、羽織っていたマントで自分を包んでも寒い中、ようやく街に辿り着いた。

視界の端でキラリと光るものが気になって、空を仰げば鳥がいた。

ああ鳥かと思ってから、鳥が光りを反射するものではないと思いなおし、足を止めてそれを凝視した。

「どうかされました？」

「あの鳥、こっちに向かつて飛んできてる」

鳥はとても小さく、青い光沢を帯びていた。見た目、とても硬そう。硬い鳥ってなんだ。

鳥は目の前まで来ると、ピタリと空中で静止し、唐突に話し出した。

「サウスナの旅行は楽しんでますか？」

それは丁寧な女の声だった。

「……はい？」

眼前の鳥は明らかに生命を感じられず、機械的なそれが人の言葉を操る事にさえ違和感がある。

「そちらに誰かいるのですね。今お話されても大丈夫ですか？」

誰かいる。声を出したのが自分なのだから、誰かが自分なのはわかる。

ちらりとサディアを見れば、呆氣にとらわれたまま鳥を眺めていた。

「サディア、知り合いか？」

この物体を知り合いと呼んでよいか疑問だったが、名前に対する反応の遅さを除いても長すぎる間がうまれた。

知らないと言うか、記憶が無いと言うか、どちらで迷ってるにしろこの鳥についてはわからないと言う事だろう。

「えっと、ヴィレスさんの方では」

「鳥に知り合いはいなくてだな」

「あれ、ええと」

女の声が、鳥から小さくブツブツと聞こえてくる。女の声だけでなく、良く聞けば別の声もしているようだ。

鳥は、通信機か何かか。

「そうですねえ、では、旅行楽しんできてください」

鳥はそう告げると、翼の動きを無視した動作で空高くへ飛び、西へ向かって去っていった。

「サウスナの旅行ねえ」

サディアを見ても、記憶になんの引っかかりも無いか、飛び去った先の空をただ見つめていた。

「サウスナなんて、何も無えだろ」

仮にサディアがその場所を目指していた最中だろうが、サウスナから帰ってきた最中だろうが、俺には関係の無い話だが。

「さっさと宿とろうぜ」

こんな時間まで大丈夫な場所は、どうせ良く無い場所だろうが、早く暖まりたかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0201i/>

飽きやすい人が何年もかけて書こうとするファンタジー【完成日 = 未定】第 1

2010年10月9日19時53分発行